

平和の塔と元亀の兵乱殉難者鎮魂塚は、1571年11月12日の織田信長（1534～1582）による叡山焼き討ちを記念するためにつくられた。信長軍は、比叡山東麓の坂本の街を攻め、市街を焼き、延暦寺の守護神社である日吉山王の二十一社すべてを焼き払った。次いで軍勢は比叡山を登り、根本中堂をはじめ、三塔十六谷の五〇〇以上の堂塔や僧房を三日三晩かけてすべて焼き尽くした。また坂本の街から炎に追われて山上に逃げ込んだ者千余名、山上の僧俗あわせて千余名が虐殺された。百年続いた戦国の世を平定し、天下統一を目指す信長に対し、延暦寺は越前の朝倉家や近江の浅井家などの反信長陣営の武将たちと連携していた。

比叡山はその後、天下統一を果たした豊臣秀吉（1537～1598）や、江戸幕府（1603～1867）を開いた徳川家康（1543～1616）の庇護を受け復興された。しかし、1571年の兵乱はその後の比叡山に大きな陰をおとし続けたため、四百年以上の月日を経て、鎮魂塚を建立することとなった。信長によって殺された人々の魂を鎮めるため、遺品を埋め、塔が建立された。1582年に本能寺で火に焼かれた信長その人の霊にも、恩讐を超え、怨親平等の心をもって追善供養が施されている。世界鎮護の如法塔の文字は、第二五三天台座主、山田恵諦（1900～1999）の手によるものである。